

原 明美 (音楽評論家) Akemi Hara

シューベルト：3つのピアノ曲 D946

F.Schubert: 3 Piano Pieces D946

- | | |
|---------------|--------------------|
| 第1番 アレグロ・アッサイ | No.1 Allegro assai |
| 第2番 アレグレット | No.2 Allegretto |
| 第3番 アレグロ | No.3 Allegro |

シベリウス：即興曲 第5番 ロ短調 Op.5-5

J.Sibelius: Improromptu No.5 in B minor Op.5-5

シベリウス：3つのソナチネ 第1番 嬰へ短調 Op.67-1

J.Sibelius: Sonatina No.1 in F-sharp minor Op.67-1

シベリウス：2つのロンディーノ 第2番 嬰ハ短調 Op.68-2

J.Sibelius: Rondino No.2 in C-sharp minor Op.68-2

シベリウス：ロマンス 変ニ長調 Op.24-9

J.Sibelius: Romance in D-flat major Op.24-9

* * *

ドビュッシー：版画

C.Debussy: Prints

- | | |
|------------|---------------------------|
| 1. 塔 | 1. Pagodes |
| 2. グラナダの夕べ | 2. The Evening in Granada |
| 3. 雨の庭 | 3. Gardens in the Rain |

ショパン：バラード 第2番 へ長調 Op.38

F.Chopin: Ballade No.2 in F major Op.38

ショパン：ノクターン 第4番 へ長調 Op.15-1

F.Chopin: Nocturne No.4 in F major Op.15-1

ショパン：バラード 第4番 へ短調 Op.52

F.Chopin: Ballade No.4 in F minor Op.52

2016年日本公演スケジュール

11月19日(土)	東京	NHKホール ※	主催：NHK／NHK交響楽団
11月20日(日)	東京	NHKホール ※	主催：NHK／NHK交響楽団
11月22日(火)	名古屋	電気文化会館 ザ・コンサートホール	主催：電気文化会館
11月23日(水・祝)	所沢	所沢市民文化センターミューズ アークホール	主催：所沢市民文化センターミューズ、テレ玉
11月25日(金)	東京	東京オペラシティ コンサートホール	主催：ジャパン・アーツ
11月26日(土)	西宮	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール	主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※デーヴィッド・ジンマン指揮／NHK交響楽団との共演

後援：ノルウェー王国



協力：ソニー・ミュージック ジャパン インターナショナル、スタインウェイ・ジャパン

シューベルト：3つのピアノ曲 D946

ウィーンで活躍したF.P.シューベルト(1797-1828)は、特に歌曲を数多く残したが、ピアノ曲にも、歌曲を想わせるロマンティックな旋律美があふれている。「3つのピアノ曲」は、1828年5月の作と推定され、作曲者の死後、1868年に遺作として出版された。シューベルトの作品番号(ドイツ語番号=D)で知られるO.E.ドイツ語によれば、元来「即興曲」として作曲されたという。実際にこの作品は、性格的に即興曲と言えるものであり、絶妙な転調などによって、ロマンティックなニュアンスや、独特の陰影が作られている。なお、この曲集は、全4曲で完成するはずが第3番までで中断されたらしく、およそ半年後の11月にシューベルトは世を去った。3曲の内訳は、第1番:アレグロ・アッサイ(変ホ短調)／第2番:アレグレット(変ホ長調)／第3番:アレグロ(ハ長調)。

シベリウス：即興曲 第5番 ロ短調 Op.5-5

フィンランドの国民楽派を代表するJ.シベリウス(1865-1957)の残したピアノ曲は、唯一の「ソナタ」Op.12および「3つのソナチネ」Op.67を除くと、すべてが小品集だった。1893年に完成された「6つの即興曲」Op.5は、彼のピアノ曲で最初に出版されたものである。その第5番は、分散和音を多用した、きらめくような楽想を持ち、清楚な美しさに包まれた魅力的な小品である。

シベリウス：3つのソナチネ 第1番 嬰へ短調 Op.67-1

1912年に作曲された「ソナチネ」3曲は、いずれも短いが、音楽的に洗練された味わいを印象づける。第1番も、構成が簡潔で、無駄のない控えめな音の配置で書かれていながら、表現に深みがある。曲の内訳は、第1楽章:アレグロ／第2楽章:ラルゴ／第3楽章:アレグロ。

シベリウス：2つのロンディーノ 第2番 嬰ハ短調 Op.68-2

「ソナチネ」と同じ1912年の作品。速いテンポによるトッカータ風の曲であり、高音域を駆ける軽快な楽想が印象深い。

シベリウス：ロマンス 変ニ長調 Op.24-9

「10の小品」Op.24は、シベリウスが1894年ごろから書きためていた小品を、1903年にまとめたもの。その第9曲「ロマンス」は、ピアノの広い音域を駆使し、壮麗な響きに彩られた小品である。

ドビュッシー：版画

フランスの作曲家C.A.ドビュッシー(1862-1918)は、水や光などの自然の世界を、音楽のなかで独自にイメージした。1903年に完成された「版画」は、彼がピアノ曲において自らの新しい様式を確立した、最初の曲集とされる。全3曲から成り、画家のJ.E.ブランシュに献呈されているが、第2曲だけは、全曲の完成に先立ってP.ルイスに捧げられたという。

第1曲「塔」:「ほどよく活発に」。1889年のパリ万国博覧会で、ジャワのガムラン音楽を聴いたときに受けた感銘に基づいて、作曲されたという。五音音階による東洋風の主題に始まり、それが微妙に形を変えて繰り返されるなかで、独特の雰囲気醸し出す。



第2曲「グラナダの夕べ」:「ハバネラの動きで」。舞曲ハバネラのリズムに乗せて、スペインの古都グラナダの夕暮れを描いている。スペインを訪れたことのなかったドビュッシーの、豊かな想像力と創造性が光る。

第3曲「雨の庭」:「明瞭に、そして速く」。細かな分散和音が多用された技巧的な曲だが、先の2曲と同じく描写的でもある。その主題は、「ねんねよ、坊や」と「もう森へは行かないよ」という、フランスの二つの童謡の旋律に基づいている。

ショパン：バラード 第2番 ヘ長調 Op.38

ポーランドのワルシャワ近郊に生まれたF.ショパン(1810-49)の作品は、大半がピアノ曲だった。元来「物語詩」を意味するバラードは、文学の形式として、また音楽では歌曲の分野で用いられたが、初めてピアノ曲に採用したのはショパンだとされる。彼の残した4曲のバラードは、文学のバラードの持つ「物語」としての特色も含んでおり、ポーランド出身の詩人A.ミツキエヴィチの叙事詩にヒントを得たとも考えられている。

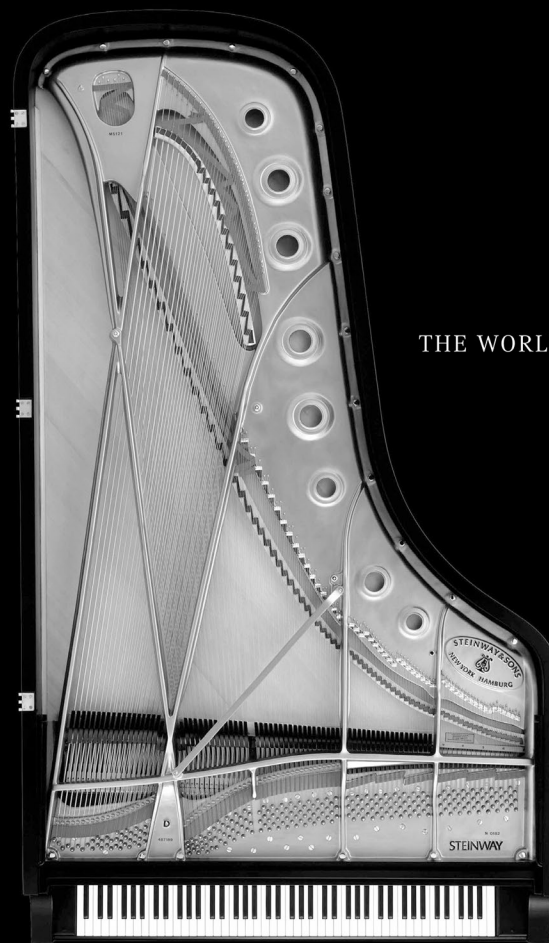
第2番のバラードは、1839年に完成され、作曲家のR.シューマンに献呈された。互いに対照的な二つの部分が交互に現れ、静かなコーダで終わる、という構成で書かれている。関連があるとされるミツキエヴィチの詩は、「シヴィテシ湖(別名ヴェイリの湖)」という。この湖は、ダツタン人の征服者に攻め囲まれた町にあり、町の乙女たちは、彼らの言いなりになるよりは死を選ぼうと、天に向かって死を乞うた。すると地面が割れ、乙女たちは湖にのまれたが、天の力で湖岸の花に形を変えられ、この花に触れた征服者は不幸な運命をたどった、という物語である。

ショパン：ノクターン 第4番 ヘ長調 Op.15-1

ピアノ曲としてのノクターン(夜想曲)の様式は、アイルランド出身のJ.フィールド(1782-1837)が創始したと考えられており、それは、分散和音による伴奏に乗せて抒情的なメロディが奏でられる3部形式の小品である。その様式に基づいてショパンは、彼ならではの繊細優美でロマンティックなピアノイズムにあふれたノクターンを、21曲ほど作曲した。Op.15-1は、1833年に出版され、友人のF.ヒラーに献呈されたノクターンであり、清澄な美しさを持つ主部と、激情的な中間部とのコントラストが目される。

ショパン：バラード 第4番 ヘ短調 Op.52

1843年に完成され、C.N.ドゥ・ロスチャイルド(ロートシルト)男爵夫人に献呈されたバラード。ソナタ形式に変奏曲とロンドも加わった自由な形式で書かれている。二つの主題が変奏されるクライマックスから、コーダに至るドラマティックな場面は、特に印象深い。関連があるとされるミツキエヴィチの詩は、「3人のブドリス」というリトアニアの物語。父親が3人の息子たちを旅に出し、何か宝物を持ち帰るよう命じたが、何年過ぎても帰らないので、父親は、彼らが戦死したと思った。しかし、ある吹雪の夜、この3人の兄弟は、長旅で得た財宝としてそれぞれ花嫁を伴って帰ってきた、という内容である。



THE WORLD'S FINEST PIANO